

法隆寺出土土器の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部考古第二調査室は、昭和55年10月に行なわれた法隆寺昭和大修理発見資料展に際し、法隆寺所蔵の土器類の調査を行なう機会を得た。ここでは東院地区（総殿・舍利殿・伝法堂）の地下遺構から発見された土器類^①、西院金堂から出土した緑釉円面硯、東室・東院北室院出土の黒色土器・瓦器について紹介する。

東院地区（総殿・舍利殿・伝法堂）出土土器 総殿・舍利殿の馬道近辺で検出された井戸から出土した土器には、土師器甕A(15)・高杯・須恵器杯B(8・9)・壺B(12)・壺Q(13)・壺Kがある。時代的には、平城宮Ⅱの時期に相当する。多くは平城宮・平城京出土の土器と共通する。12は長石粒を含むねっとりした胎土であり、美濃地方産であろう^②。この井戸の西北で検出された大穴の埋土からは、平城宮Ⅲと共通する土師器杯A(14)・皿・甕B・鍋が出土している。この他、出土地点・層位は明確ではないが、東院創建時の掘立柱建物の柱掘形・柱痕跡・整地土から出土したと思われる土器類には、土師器皿A(5)・碗A(3・4)・甕C、須恵器杯A(1・2)・杯B蓋(6・7)・皿E(10)・平瓶(11)があり、平城宮Ⅱ～Ⅲの時期に比定される。10は灯明皿、他に11と同形態で口縁部を打ち欠き、蔵骨器とした例がある。

東院は、縁起によれば、天平11年八角堂の造立をもって完成したとされる。柱穴・整地土から出土した土器の年代とも一致する。ただ前述の井戸及び井戸西北の大穴は、礎北に対して20度西偏する掘立柱建物群と同時期で、斑鳩宮の時期の遺構である可能性が高いとされている。しかし、今回調査した土器類の大半は奈良時代前半のものであり、斑鳩宮の時期に相当する遺物はまったくなかった。特に井戸出土の完形品に近い土器は井戸底から出土しており、これらの土器の年代が8世紀初めまで下ることから、井戸・井戸西北の大穴の年代も再検討の余地を残す。

金堂出土緑釉円面硯 昭和26年・金堂の大修理に伴う地下発掘で、基壇土中から出土したものである。表裏に厚く緑釉がかかるが、銀化して暗褐色を呈する。胎土は灰黄色で、白色・黒色粒子を含み、幾分砂っぽく、軟陶系の焼成である。陸部は径21cmに復原され、台部には21本の獣脚がつくと考えられる。硯部外堤外面に小さな竹管状の円文を付し、脚上端には楕円状の隆起を施している。

黒色土器 東室出土品で、碗・皿・高台付皿がある。いずれも内外面黒色処理している。出土状況は不明だが、瓦器との関連が考えられる11世紀の資料として注目される。16は口縁部内外面を丁寧にヘラ磨きし、器

金堂出土緑釉円面硯実測図

表は平滑である。底部外面は不調整、口径 14.9cm 高さ 5.9cm。22は皿で、外面に3回わけのヘラ磨きを施す。内面は底部から口縁部下半にかけて、ジグザグ状を重ねた幅の太いヘラ磨きを行なう。口径 10.3cm、高さ 2.0cm。20は高く外方にふんばる高台がつく皿で密なヘラ磨きを施す。底部内面は口縁部より先に、ジグザグ状に磨く。磨きは高台内面、底部外面にも行ない、一部高台外面にも及ぶ。口径 10.5cm、高さ 2.9cm。21は20より小型である。口径 8.9cm、高さ 2.1cm。25は小碗で、内外面密なヘラ磨きを施す。口径 8.6cm、高さ 3.8cm。

瓦器 碗・皿の他、燭台がある。26が北室院出土の他は東室出土である。時期的には、11世紀から14世紀代までを含む。瓦器碗は、口縁部上端は横なでし、内面は乱方向のなで、外面は不調整でつくり、ヘラ磨きを加える。胎土は細かく、黒色土器に小砂粒が多いのとは異なる。形態・法量、口縁部内外面のヘラ磨きの状況から、高い高台をもち、磨きが内外面とも密なもの(17)・高台が断面三角形状で低く、磨きが内面密で外面粗なもの(18)・法量も小さくなり、内外面とも磨きが粗なもの(23・24)・外面の磨きがほとんど省略されたもの(19)があり、この順で年代が新しくなると思われる。17の底部内面には斜格子状の暗文を、口縁部の磨きより先に施す。口径 15.4cm・高さ 6.2cm。18・23・24は底部内面にラセン暗文がある。18は口径 15.0cm・高さ 5.5cm、24は口径 14.0cm・高さ 4.9cm、19は口径 12.4cm・高さ 2.7cm。26・27は小碗で、26は口縁部外面を4回わけで密に磨く。底部内面はジグザグ状の暗文を施す。口径 8.6cm・高さ 3.6cm。27は底部内面はラセン暗文、口径 10.0cm、高さ 3.4cm。28は皿で、口縁部内面を粗く磨き、底部内面はジグザグ状の暗文を施す。口径 9.2cm・高さ 1.8cm。29は燭台と思われ、ほぼ中央に径4mmの小孔がある。

(安田龍太郎・巽 淳一郎)

註① 末永雅雄「法隆寺東院——倉利殿 絵殿 伝法堂——川土の土器」『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』国立博物館 1948年

② 岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1号窯出土四耳壺(図版19) 1981年

③ 梅原未治「日本に於ける多彩釉の容器」『美術研究』第226号 1962年

④ 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書 第13冊 1980年

